

「三重県幼稚園

カリキュラム

資料集」を読んで

子どもたちが先生の細やかな配慮で用意された幼稚園に来て、そうとも知らず生き生きと遊んで満足して帰ってゆく。先生は後片付けをしながら朝からのことをあざやかに思いかえし丹念に記録する。

この資料集にある具体的な保育の手がかりが自分のものになっている先生は、記録していくうちに一層子どもへの理解が深くなり、あらためて反省されて成長する。

三重県幼稚園カリキュラム資料集は教育要領に示された目標や内容を十分にふまえ

た上にこのような具体的な日々の積み重ねから生れた指導計画例や指導資料である。

活用する側からいえば、子どもの生活が先ずあってそれをどのようによみかなく流れさせ内容を豊かにするか、教育的な配慮をどうしたらよいか、資料集をよりどころとして独自の肉付けをしながら保育に当たるといふことになる。

先日ふとこの資料集を手にして、思わず引き込まれ最後まで読んでしまったけれど、これまでこの種の指導書にこんな魅力を感じたのは、初めてのような気がする。

保育の骨組を親切に、わかり易く具体的に示されているので使い易いし、よい相談相手になる。三重県としての現代的意義のあるものを選んで問題を提示したと書かれているけれど別に三重県にかぎられた問題ではない。

けれどもこの資料集を手にして真剣に保育にとりくんだ時に、子どもを育てるよろ

こびや尊さを一層感ずると共に、先生方の努力がきびしく求められていることに気がつく。

たとえば、一日という単位の中に幼児にとって必要な望ましい活動が、どのような面からみてもすべてに渡って含まれていることが望ましいとか、実践記録は幼児理解の上に保育の反省の資料にするために、保育の理論化のために、内容のあるものを時間的経過を追ってひとりの幼児もとりにこぼれないように、連続的に記録することが要求されている。

現場の先生にとつて、時間的にも体力的にも大変な努力で、それは実践例ににじみ出ている。が、常にといわれると現状を考えてふと溜息の出ることである。子どもの幸せの重さとそれを支える土台を確かなものにするための手引書として大変手ごたえのある本だと思った。

(高橋滋子)